

張金界奴本蘭亭序

正長署



主圖版①

蘭亭序

精拓張金界奴本

永和九年

歲在癸丑暮春之初會

于會稽山陰之蘭亭脩禊事

也羣賢畢至少長咸集此地

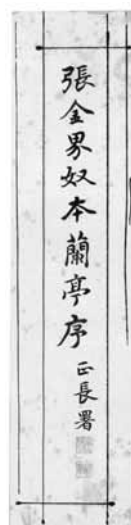
有峻嶺茂林脩竹又有清流激

湍映帶左右引以為流觴曲水

「落ち穂拾い記」 ⑮

丹羽海鶴筆「張金界奴本蘭亭序題簽」

図版② 丹羽海鶴自筆題簽



図版③ 晚翠軒本「張金界奴本蘭亭序」



図版④ 西東書房本「張金界奴本蘭亭序」大正二年



図版⑤ 右：晚翠軒本題簽 左：丹羽海鶴自筆題簽



40代の始め頃には、都立の全日制の高校に移った。勤務環境は大きく変わったが、駅の近くの学校であったので仕事帰りに展覧会や古書店めぐりなどで都心に出るには大変便利であった。多いときには週に二、三日都心に出ていたのではなからうか。特に気になる古書店には、毎週定期的に通っていた。いつの頃から馴染みの店主と顔をあわせ話をしていると、「伊藤さん、こんなものお使いになりますか。」といって差し出されたのは、小さな薄い画仙紙の小片である。手に取って見ると、毛筆で「張金界奴本蘭亭序 正長署」とあり、その下に「丹羽正長」、「海鶴」の二顆の小印が捺されていた(図版②)。この丹羽海鶴(1864-1931、本名は正長、海鶴と号す。日下部鳴鶴に師事)の張金界奴本蘭亭序の題字は、これまでも何回も見たことがあり、見覚えがあった。戦前の晩翠軒出版のコロタイプ精印の「張金界奴本蘭亭序」の題字(図版③)が、確か丹羽海鶴先生の書である。それを書かれたときの習作ではないでしょうかと話した覚えがある。お使いくださいと言われ、頂いて帰った。帰宅してこの晩翠軒本は、何冊か購入した覚えがあり、取り出して比較してみた。驚いたことに、晩翠軒本に使用された題簽そのものであることが判明した。比較図版(図版⑤)の右が、出版された晩翠軒本の印刷題簽であり、左が自筆題簽である。筆勢、滲み印影の傾き加減まで完全に同じである。「張金界奴本蘭亭序」は、明の秋碧堂法帖と餘清齋法帖に刻されたものの二種がある。晩翠軒本は、秋碧堂法帖であり、日下部鳴鶴所蔵本を影印している。巻頭の右下に「鳴鶴秘笈」の朱文印が捺されている。架蔵の影印本は、昭和十二年第三版とあることから、おそらく昭和の初めころから刊行されていたのではなからうか。それ以前の大正二年西東書房から日下部鳴鶴の自筆題簽で「張金界奴本蘭亭序」が影印されている(図版④)。戦前には、この日下部鳴鶴所蔵の「張金界奴本蘭亭序」は、影印法帖のベストセラーであったろう。この偶然に頂いた、珍しい丹羽海鶴翁自筆の題簽を架蔵の秋碧堂法帖本の「張金界奴本蘭亭序」の捺拓精本(右頁主図版①)内題簽として、張り込み大切にしている。伊藤滋(書齋名・木鶏室)

書道芸術院

令和の群像 (2021)



小宮 静舟

いつからでしょう。書との出会いは、母に尋ねてみました。

昭和30年代、福岡市の片田舎にある公民館に、5才年上の姉と通い始めたらしいのですが、当初の記憶はなく、後に先生のご自宅に、5年生までバスで通った事は覚えていません。

人見知りだった私の居場所は、一番後ろの席。板の間に冬は火鉢、小さな座布団が懐かしい。年の瀬には、先生の奥様からぜんざいの振る舞いがあり、その嬉しかった思い出は、後に当教室でのお楽しみ会に生かされています。

中学・高校では迷わず書道部に入部。高校での顧問下永静舟先生からいただいた年賀状の雅号に魅了されたのを覚えています。当時、実家の床の間には、一艘の小舟が静かに漂っている水墨画があり、子どもの頃

から眺めては心が落ち着いたものでした。下永先生とは、雅号「静舟」との出会いでもありました。

時を経て結婚、出産。ある日、公園で子ども達を遊ばせていた時の事です。隣りの奥様と「私達もそろそろ何か始めないかね」と言う話になり、共通の趣味が書道で、池内岳城先生とのご縁をいただくことになりました。

下の子が7ヶ月の時、夜中に清書した作品を添削していただきながら、先生の綺麗な書に近づきたいと、一生懸命だった様に思います。3年程経過した折、免許状をいただきました。勧められるまま、息子の幼稚園の同級生5名から始めた教室も、地域の皆様に支えられて30有余年。「全国学生書道展」への参加も恒例となっています。目標は、高校まで続けてもらうことです。

さらに書活動を続けている人たちは、書道芸術院展の出品作品を額装して玄関や床の間に飾る等、ご家族の宝物にもなっているようです。

ご縁をいただきました故恩地春洋先生は書道芸術院展や毎日書道展との繋がりを作って下さり、私の書道人生が豊かになりました。

2018年、毎日アートサロンでの「書道芸術院の書・漢字」展へ出品の機会をいただきました。地方で学ぶ私には大変衝撃的なことでした。辻元大雲先生からの直々の添削は、とても有り難いものでした。また、鬼頭墨峻先生からは「だから書きではなく、減り張りの効いた作品を」とのご高評をいただき、目が覚める思いで拝聴いたしました。

自身の感性に火が付く事を期待しつつ、どの様な表現が出来るのか、天国の池内岳城先生にお尋ねしながら、模索して参りたいと思います。

書の道への架け橋となり応援してくれた96才の母に感謝し、そしてさまざまなご縁の連続に幸運を感じます。これまでご指導いただきました諸先生方、出会えました皆様に感謝申し上げます。

書道芸術院 令和の群像 小宮静舟

書のひろば

理事長 辻元大雲

第74回書道芸術院展無事終了 コロナ禍にもめげず開催

昨年第73回展はまだコロナウィルス蔓延のうわさ位で、一連の諸行事（表彰式・祝賀会・作品研究会など）は全て順調に行えたが、今回展ではそれら全てが行えなくなり、一時は開催そのものが出来るかどうか危ぶまれた状態であった。幸い会場の東京都美術館は昨年4月前後の緊急事態宣言の折とは違って、会場使用は可能であったため今回展も無事開催できた。他の展覧会が軒並み中止や順延に追い込まれた中、本院は極めて恵まれた団体であった。これも会員諸氏のご理解、ご努力、ご協力があったからこそ深く感謝申し上げます。

昨年6月の運営委員会で展覧会開催要項、組織など基本方針を決定、10月下旬に第72回全国学生書道展作品募集、審査を行った。11月下旬には第74回展一般公募・無鑑査作品の搬入、12月中旬に未表装での鑑別審査を行った。コロナウィルス蔓延の影響がますますひどくなってきた最中での審査となり、当番審査員や審査事務担当者特に地方の方の欠席が目立ったことはやむを得ないことであった。当番審査員以外

は急遽補充を行って、審査事務遂行に支障をきたさないように配慮した。

1月中旬には審査会員候補以上の書類搬入、下旬の作品搬入まで特に支障なく行えた。院展全体の作品出品数は当初予想された出品減は前号でもお知らせした通り微減ですみ、全国の会員諸氏のご協力ご努力の賜物と重ねて感謝申し上げます。

特別賞選考 審査会員候補以上の特別賞選考は選考委員（院理事・監事計20名）の内、8名の欠席となり、過半数は維持できたものの通常通りの選考が出来るかどうかが不安な状況となった。この件については前号でもお知らせした通り、今回の特別処置として最終決定を運営委員長・実行委員長の名に一任していただき、各賞及び秋季展などの出品者選考なども同様に行った。



記者会見風景

結果は前号にて速報したが、ほぼ通常通りに選考できたことは有難かった。各賞に入賞された方々には心よりお慶び申し上げます。

陳列 2月4日陳列は作業に当たる人員を少なくし、担当業者（川端商会）に大部分をお願いしたため予定より早めに完了した。

記者会見 記者会見は予定通り陳列日（2月4日）に会場第1室にて毎日新聞社はじめ書道関係出版社、評論家などにお集まりいただき、下谷洋子実行委員長による全体解説、辻元大雲運営委員長から本院の基本姿勢、特色など細かく説明を行った。参加者は約20名。評論家の眼 今回展では毎日書道会顧問の船本芳雲先生と、天来書院比田井和子先生にご依頼、2月4日陳列日午後選評をお願いした。それぞれ4〜6名の作品をお取り上げいただいた。批評は作品協に展示のほか、印刷して来場者に配布した。

会期 2月5日から11日までの会期中は連日参観者が訪れ、昨年より少ないのはやむを得ない状況であったが盛況であった。運営委員長・実行委員長がほぼ連日会場に詰めて来場の方々への応対を行った。受付などは専門業者の他、近隣からの出品役員に交代で担当していただいた。ご協力に感謝。

「書道芸術院の書・現代詩文」17人展出品者の軌跡 昨年秋季展併催としてアートサロン毎日で開催した企画展のその後の作家の足跡として、本展会

場内に17人の出品作品を集約して陳列、秋季展からの成長ぶりを検証した。外部講師の船本芳雲・永守蒼穹両先生に再度お願いしてご批評をいただいた。別に印刷して関係者に配布した。

撤回・搬出 2月11日午後2時から撤回作業を行った。やはり作業担当者制限して短時間で行った。陳列部のほか総務部が作品点検等、遺漏無いように行っていた。蔭の貢献者に深謝。12日には作品搬出を総務部が担当。都美での作業を終えた。

今回展では諸々のイベントや主要行事が全て取り止めとなり、誠に残念であったが、何より全国の本院会員、出品者の皆様のご支援ご理解に深く感謝申し上げます。来年には第75回記念展を迎える大きな節目に当たる。現在の状況がどうなっていくのか、想像も難しいが何とか平常の状態に戻ってくれることを祈りたい。

会員諸氏の更なるご支援をお願いしたい。（詳細は別記参照）

濱田尚川・牧泰瀟両先生
高知・大分にて大個展開催

本院参与会員、濱田尚川先生
米寿記念個展開催

・会期 2月26日〜3月3日
・会場 高新画廊
本院名誉会員、牧泰瀟先生
経文大作展開催

・会期 4月7日〜18日
・会場 大分県立美術館

連綿 (6)

* 連綿体について

多様な連綿線を見てみましょう (高野切第一種より)

㉗ 太いまま書く

㉘ 細く書く

㉙ 太い↓細く

㉚ 細い↓太く

㉛ 短くなる

㉜ 連綿線がなくなり2字が1字のようになる

㉝ 伸びやかに書く

㉞ 反動をつけて書く

㉟ 線は続けず気持ちで書く(意連)

基礎基本講座

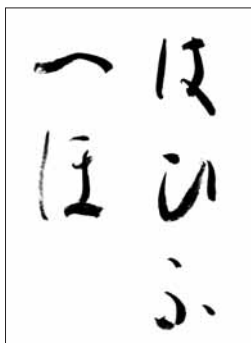
現代詩文書基礎基本講座 (10)

小竹 石雲

【臨書から現代詩文書への展開】

① 孔子廟堂碑風のひらがなの表現方法

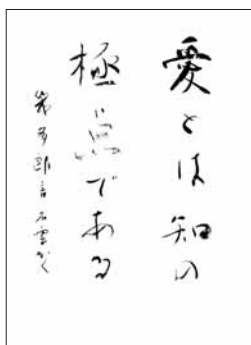
・中膨らみの線で、形も丸味をもたせた。動きは単純に素直に大きく動かす。余計な色を混ぜずに純色に徹した。ゆで卵の白身の肌の艶やかさを想像するとよいと思う。漢字と調和させることを考えて、かな書の線そのままだではなく、少し骨力を加えてみた。



② 孔子廟堂碑風の現代詩文書

做書的になりすぎても現代の書としてのかななものかと思い、孔子廟堂碑の内剛外柔にスポットをあてて書いてみた。あえて楷書にこだわらず、伸びやかさと明るさ、そして上品さをねらって書いてみた。想いを筆に乗せて紙面にしっかりと定着できることを祈って筆を運ばせるが、なかなかうまくいかず反古山積。だんだんと最初のねらいから遠ざかる。迷路に突入。焦ってくる。心機一転をはかって再度挑戦。書の「極点」求めて…透明感のある線の不足に気づき、書きなおした。

②



第74回 書道芸術院展

会期 令和3年2月5日(金)～11日(木・祝)
会場 東京都美術館(上野公園内)

理事長 辻元大雲



常務理事 小竹石雲



常務理事 下谷 洋子



常務理事 後藤大峰

※第74回書道芸術院展が開催されました。書道芸術院ホームページで、会場の作品展示の様子が動画で紹介されています。ぜひご覧下さい。次号(720号)は、第74回書道芸術院展の特集を組み、入賞作品等を掲載いたします。

古典鑑賞

④30

隸書木簡（漢時代）③

筆者不明

① 居延漢簡

前漢・元康四年（前62）



（台北中央研究院歷史語言研究所藏）

② 居延漢簡

前漢



（台北中央研究院歷史語言研究所藏）



肩水候官。元康四年十二月四時雜簿。



- (1) 貸甲渠候史張廣德錢二千、責不可得、書到／驗問、審如猛言。為收責言、謹驗問。廣德
(2) 對曰、酒元康四年四月中、廣德從西河虎猛都／里趙武取穀錢千九百五十一、約至秋予。

〔解説〕1930年、現在の甘肅省北部エチナ河流域で発見された一万件以上にのぼる漢時代の木簡は居延漢簡と名付けられ、現在台北中央研究院歷史語言研究所に収蔵されている。左掲の①居延漢簡は帳簿につけた札とみられる。波磔がゆったりとしていて表情豊かな八分隸である。②居延漢簡は、公文書とみられ、

左右の払いの勢いがよく、筆の運びもリズムカルでスピード感のある大胆な筆致が特徴である。同じ隸書でも、書かれた時代や書き手によってさまざまな個性がみられる。木簡隸書の多彩な表情を捉えて臨書することが大切である。

（編集部）

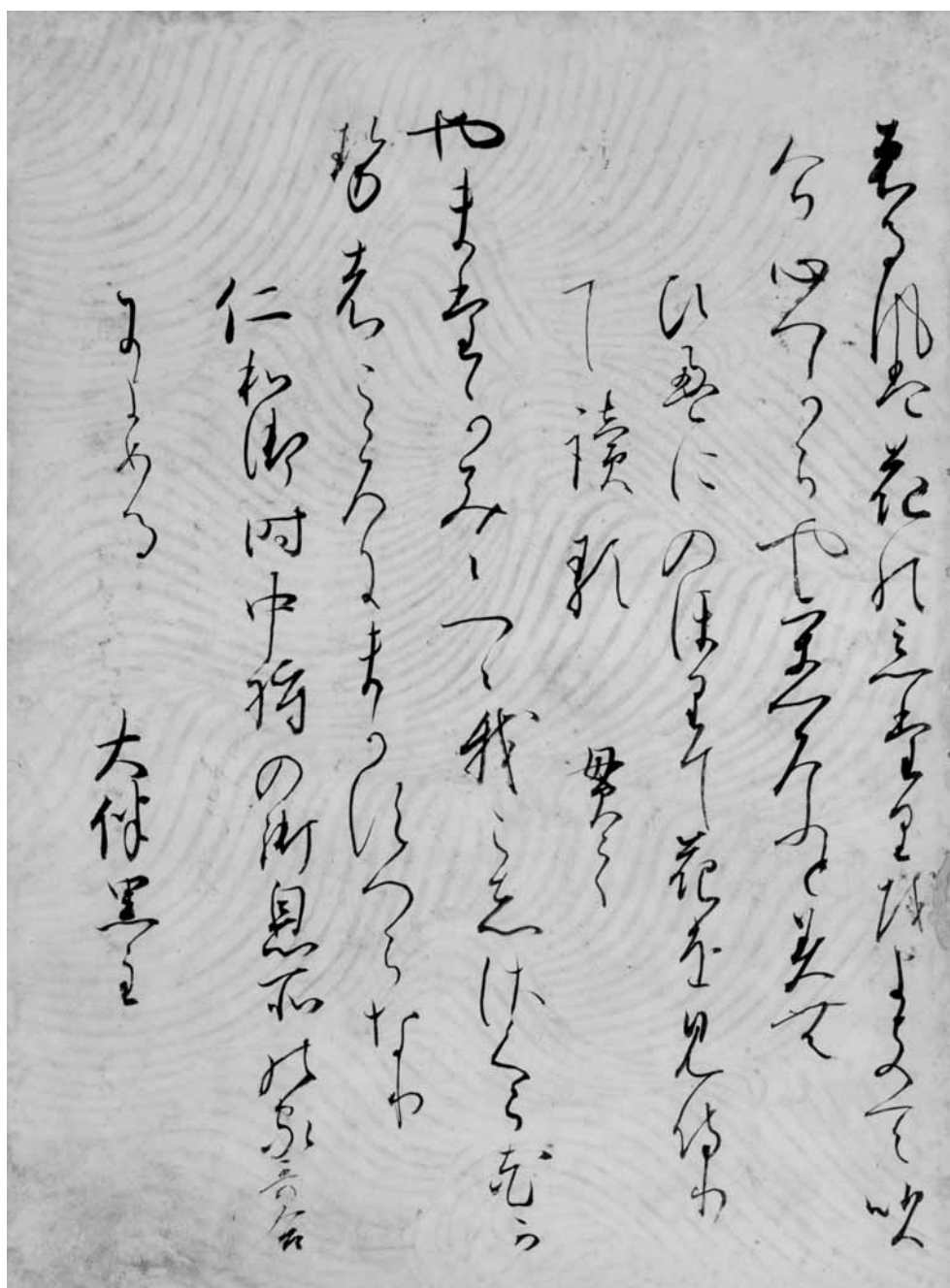
※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみ可）

漢字研究部臨書課題（半紙普通判・縦使用）上記掲載部分より何文字臨書してもよい。

※ 特別研究部臨書課題（A. 大作の一部毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙可）
B. 小品の一部半切以上半切以内・全紙（約68×68cm）以内可（縦横自由）

→ 注意

今月の特別研究部は当ページ上記掲載の①・②「居延漢簡」の中から臨書箇所を選び、出品して下さい。



(東京国立博物館蔵)

(掲載図版・85%に縮小)

かな研究部臨書課題

特別研究部臨書課題

- ④半紙普通判(料紙可)・縦長に使用
別紙を裁断して貼付可。半倭紙は半紙サイズに切って使用のこと。
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨可)
A. 大作の部Ⅱ毎日展審査員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部Ⅱ半切以上、半切以内・全紙(約68×68cm以内)可(縦横自由)
△当該古筆の左記掲載部分以外も可▽

〈よみ〉

はる風は花のあたりをよきて吹
け心づからやうつろふとみむ

ひえにのぼりて、花を見侍り
て読る 貫之

やまたかみゝつゝ我こしさくら花か
ぜはこゝろにまかすべらなり

仁和御時、中将の御息所の家哥合
による 大伴黒主

〈解説〉平安時代、歌をよくし、美しい文字を書くことが王朝貴族にとって欠くことのできない教養であった。当時は宮廷の儀式や行事、お祝いに際して心を尽くした贈り物をするのが通例であった。とくに珍重されたのが、身の回りにおいて鑑賞する調度手本、主として歌集を書写したものであった。中でも『古今和歌集』は最初の勅撰和歌集で最も重要視され、筆跡の巧みな人によって数多く書写された。この元永本古今集は、元永3年(1120)の書写年代が記されている『古今和歌集』の最古の完本である。巧妙な筆致と華麗な料紙装飾とが一体となつてとけ合い、極めて貴重な優品と言える。(編集部)

※古筆は原寸(以上も可)で臨書しましょう。

※落款を必ず入れる。

○○臨(押印のみも可)

漢字規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書

習い方解説 ⑥

辻元大雲

春風桃花谿

(姜夔)

(春風桃花の谿)

5字句、春の風情の語句です。

今回で最後となりました。草書での表現です。連綿などは入れておりませんが、自然な筆脈の流れを心したいです。草書ですので一部に連綿を入れて流れよい表現も面白いです。さらに潤渴の変化が加わると、表情が大きく変わります。

これまで行草書で、あまり書体上の変化は取り入れませんでした。が、皆さんは様々な表現を積極的に試みてください。

半紙も条幅も練習すればするほど、楽しみが増してくると思います。楽しみながらコツコツ練習してください。



春風桃花谿

よみ (春風桃花の谿)

書体＝自由

漢字規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

習い方解説 Ⅵ

名越蒼竹

和風慶雲

〔近思録〕

(和風慶雲)

和やかな風と、めでたき雲。

私たちが臨書して学ぶ楷書古典の多くは拓本です。そしてその多くは刻者の解釈が入っていたり、自然の劣化によって不鮮明になっていたりと、想像力をかき立てられるとはいえず、どこか冷たく実体から離れた感じがするのも否めません。これに反して肉筆からは、拓本からは分かりにくい温かさや筆者の息づかいが伝わってくるようです。また楷書とは言え、多くは行書に近い書き方がされていることも分かります。今回は少し温かみや柔らかさを出すべく、智永の「真草千字文」肉筆本を参考にしました。

和風慶雲
蒼竹

和風慶雲

よみ (和風慶雲)

書体Ⅱ楷書

かな規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

奥田瑞舟選書

習い方解説 ③

奥田瑞舟

さくら色いろはなの庭はなの春風はるかぜあともなし
とはばぞ人ひとの雪ゆきとだに見みむ

（藤原定家）

さくらいろはな
はるかぜあともなし
とはばぞひとゆきとだに見む

さくらいろはな
はるかぜあともなし
とはばぞひとゆきとだに見む



よみ方

さく(久)ら色(いろ)の(農)庭の春(者る)風(可勢)あともなし(那)し
と(東)は(盤)ば(者)ぞ(處)人の(能)雪(遊支)と(登)た(多)に(二)見む

創作

*料紙は半紙版(33.0×24.5cm)
を使用しよう。

墨色は総てを左右すると言われる程大切なことです。墨のバランス、墨の濃淡ですが、墨の質によるものではなく字の大小・太細・墨量・筆圧の変化による濃淡もあります。今回特に潤渇を意識して、密な線を入れて強調する部分を作りました。墨量の変化と潤渇による立体感を出したいと思いました。

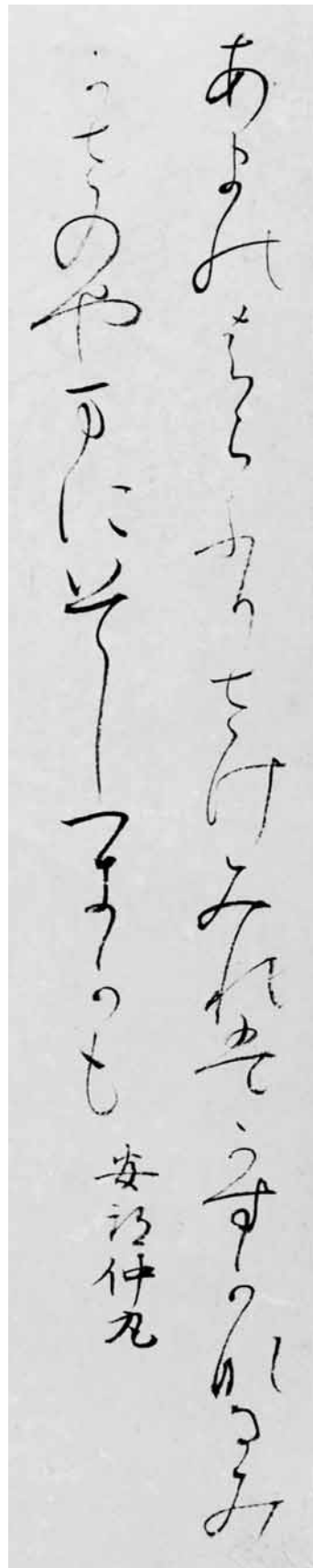
1行の中の強弱の変化を細やかに表現する、これが広がって作品全体構成につながる。墨が少なくなっていくの運筆の速度を考へることも大切です。

墨液は、明るさや透明感が出ません。かな用の墨をゆったり擦って美しい色の作品に仕上げてください。

かな規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿または単体を含む）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大120％）



よみ方 あまの(能)は(者)らふりさけみれば(盤)か(可)すが(可)な(那)るみ
か(可)さのやま(万)にいでしつき(支)か(可)も安部仲丸

習い方解説 ③

松村くに子

ゆき暮^ふて雨^{あめ}もる宿^{やど}やいとさくら
（与謝蕪村）

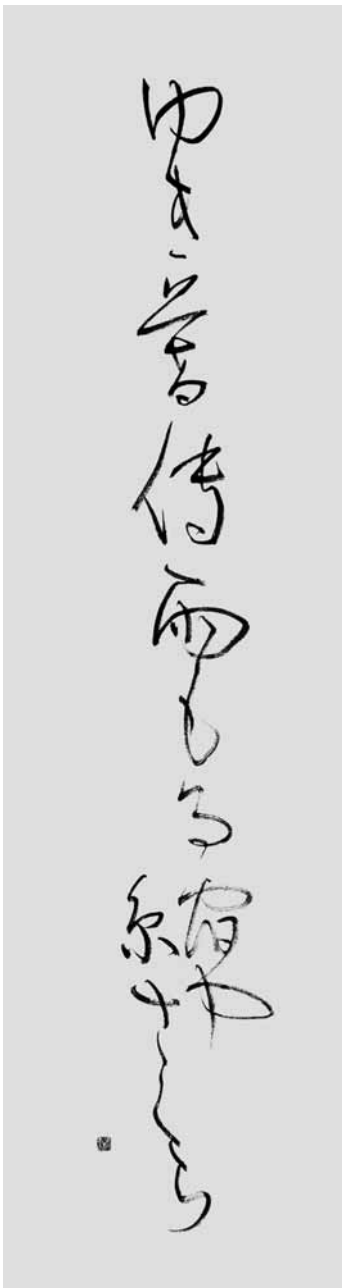
「雨もりのする宿に泊まることになったが、庭に咲いている美しい糸ざくらを見て救われた気がした」の意。

作者は糸ざくらに感謝したと思います。それを強く表現するために、行も移動し墨継ぎもしました。美しい桜への感慨は誰にでもあるかと思えます。そのこと思い浮かべながら練習してみてください。

※タテ形式に限る

かな条幅規定 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切（料紙可）

松村くに子 選書



よみ方 ゆき暮^てて(傳)雨もる宿^や(也)いと(糸)ざくら(久)ら

創作

漢字条幅規定 初段以上 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄 選書

習い方解説 (六)

千葉蒼玄

可水鑑天大士中
西鑑天大士中
大鑑天大士中

汝陽三斗始朝天 道逢麴車口流涎 恨不移封向酒泉 (杜甫)
(汝陽は三斗にして始めて天に朝し 道に麴車に逢えば口に涎を流す 恨むらくは封を移して酒泉に向わざるを)

*麴車：曲車も可

書体Ⅱ自由

出品券
貼付位置

漢字条幅規定 秀級以下 【四月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

大隅晃弘 選書

習い方解説 (六)

大隅晃弘

雖學宗一家而
變成多體

雖學宗一家 而變成多體 (孫過庭「書譜」)

(學は一家を宗とすと雖も而も變じて多體をなす)

書体Ⅱ自由

※ヨコ形式に限る

隸書は漢の時代に使われた書体であるが、長い期間に古隸、八分と変化し、草書、楷書の基礎も生まれた。また、それまでは上流階級のものであった文字が、一気に民間に広がった。木簡である。隸書は横広の書体で、すっきりとして、近代建築のようでもあり、何万年も前の地層のようにも感じられる。

木簡に見られる自由で大胆な書風を生かし、10字句を半切2行で仕上げました。

逆入の起筆や筆の開閉など、用筆の原理を学ぶだけでなく、表情豊かな造形のヒントを得る上で、木簡は有効な臨書教材といえるでしょう。

表現の幅を広げるため、是非とも挑戦してみてください。

やなせたかしさんの出身地香北
町に、アンパンマンミュージアムが
あります。子供達に大人気の
原画やイラストを多数展示
——います。舟錦書



◇用紙 市販ハガキまたは私製のハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

書体＝自由

ご注意!!
用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ(14.8×10cm)を守ってください。

習い方解説 (六)

川島舟錦

漢字(大)と平仮名(中)カタカナ(小)を調和させ、緩急やリズムを意識しながら、慣れるまで練習するうちに気脈もおのずと生まれてくる。ペンに慣れること、継続すること、できるだけ機会を見つけて、たくさん書くことが、早く上手になるコツだと思います。

はじめは手本に似せて書く。そのうち自分らしさを出せるように。

やなせたかしさんの出身地香北町に、アンパンマンミュージアムがあります。子供達に大人気の原画やイラストを多数展示しています。

急啓 不備 早春 寒さも緩み
急啓 不備 早春 寒さも緩み
春は名のみの風の寒さも感じる候と
春は名のみの風の寒さも感じる候と

大平 邑峰

(楷書) 急啓 不備 早春 寒さも緩み
(楷書) 春は名のみの風の寒さも感じる候と

(行書) 急啓 不備 早春 寒さも緩み
(行書) 春は名のみの風の寒さも感じる候と

基本用語

「急啓」取り急ぎ申し上げる場合、お悔やみの手紙などの頭語。対する結語に「不備」「不」なども。

- ◇ 小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓号を (掲載手本90%に縮小)
◇ 用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
◇ 所定の出品券を作品の右下に貼る <審査会員を含む誰でも出品可>

木ープ作品 各部総評

NO. 717

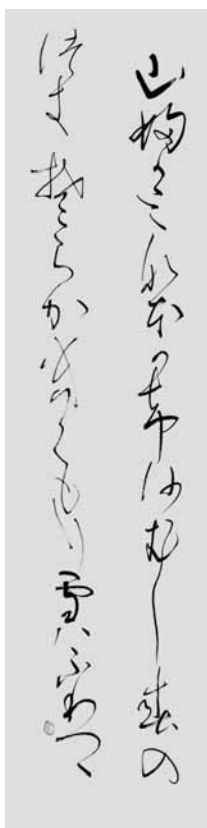
漢字部 師範 森 適

金文体で骨力ある表現。破筆と潤渾の変化が紙面に軽快なリズム感を与え、爽やかな作となった。
◎漢字部総評 上級無難にまとめた作多し。さらに意欲的な表現を求む。下級楷書は着実な基礎力が試される。鋭意努力を。(大雲評)



かな条幅部 準師 千葉 紅雲

やゝ細身ながら穂先を駆使したリズムが快い。墨量のバランスも的確で、古筆を宿す趣に感銘した。
◎かな条幅部総評 筆の弾力を生かす練習をしたい。筆の腹のまま、穂先のみといった線は好ましくない。都・楚に誤字ノ (洋子評)



現代詩文書部 特選 高橋 奎媛

白と黒のバランスがよく互いに活かし合って美しいハーモニーを奏でている。構成も見事。
◎現代詩文書部総評 線質、構成などレベルの高い作品多数。落款のない作あり残念。(梓江評)



漢字条幅部 師範 庄司 紫千

鋭いタッチで紙面を終始一貫響きわたる。穂先から生み出す筆力は習熟した手腕が窺える。

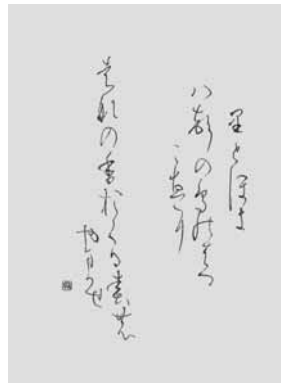


前衛書部 特選 宮城 涼萩

線の特徴と構図、潤渾の妙が絡み合い作者の息づかいが響いてくる。力みなく爽やかな香がする。
◎前衛書部総評 躍動感溢れる作品多数。又運筆の息づかいを感じる作品もあり期待する。(蓮紅評)

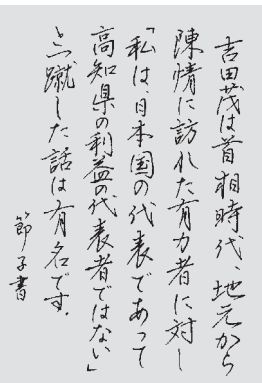


◎漢字条幅部総評 上級の課題は篆書の醍醐味を表現。しかし、慶・雲に誤字が多かった。字典でしっかり確認を。(藤扇評)



ペン字部 師範 浪川 節子

懐の広い字形に加え、行間一定の充実作。女性的な柔らかいタッチで運筆の呼吸を感じさせる作。
◎ペン字部総評 漢字の多い課題のため、字間行間のバランスが不安定の作散見。1行ごとの字数を考えた作品制作を期待。(雪枝評)



かな部 師範 岡田 麻美

真摯に手本に向き合い掌中に納めての表現は深く魅力を感じている。さらには墨量変化の研究を望む。
◎かな部総評 一部の字粒過小を除いては安定した作多くランク付けに迷った。声の誤字散見は残念。習い方解説は熟読を。(明子評)

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 下谷洋子 種谷萬城 白石和楓 倉林紅瑤

小品の部

部分拡大

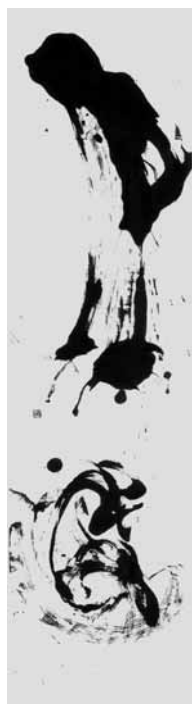


臨書 (宗苑社) 茂木 絢水 「元永本古今集」



茂木 絢水 臨

35×135cm



門脇信子書

133×35cm

前衛書 (秀水會) 門脇信子 「続」

◆意図したのか、たまたまなのか、自分のリズムに添った部分のため、実に自然に息が伝わり清品な趣。
(洋子評)

現代詩文書 (麗澤) 長谷川 翠 「蛇笏の句」



135×34cm

◆濃墨の細線の響きよく、漢字にじっくりと力強さを発揮。「冬至梅」が全体を引き締め、新鮮さ光る。
(和楓評)

臨書 (紅瑤) 原島春汀 「敦煌漢簡」



135×35cm

◆漢簡の書法に習熟し、手慣れた書き振りで、安定感がある。波勢を持つ線の特徴をしっかりと捉えている。(萬城評)

原島春汀 臨

◆上下の2部構成。淡墨の潤濁の変化が、紙面全体に心地よいリズムを漂わせている。
(紅瑤評)

創作の部(39点)	漢字	かな	現代	篆刻	前衛	臨書の部(34点)	漢字	かな
4点	5点	24点	0点	6点	32点	2点	2点	2点

総出品点数
73点

〈特選候補者〉	〈創作の部〉	〈漢字〉	〈かな〉	〈現代詩〉	〈玄穹〉	〈植松〉	〈掃雪〉	〈四枝〉	〈大雲〉	〈宮古〉	〈華祥〉	〈千葉〉	〈森地〉	〈大雲〉	〈華祥〉	〈千葉〉	〈澄春〉	〈千葉〉
紅霞	高崎	花壁	玄穹	高崎	玄穹	植松	掃雪	四枝	大雲	宮古	華祥	千葉	森地	大雲	華祥	千葉	澄春	千葉
尾形	小峰	高橋	尾形	小峰	玄穹	植松	掃雪	四枝	大雲	宮古	華祥	千葉	森地	大雲	華祥	千葉	澄春	千葉
紅霞	美加子	清琳	尾形	美加子	玄穹	植松	掃雪	四枝	大雲	宮古	華祥	千葉	森地	大雲	華祥	千葉	澄春	千葉
紅霞	美加子	清琳	尾形	美加子	玄穹	植松	掃雪	四枝	大雲	宮古	華祥	千葉	森地	大雲	華祥	千葉	澄春	千葉

臨書 (静心) 田中岳舟
「敦煌漢簡」



田中岳舟臨

135×70cm

◆大胆な筆法で気魄溢れる臨書。線の変化が魅力的。漢簡を素材に創意を加えた臨書作品で惹かれる。

(萬城評)

前衛書 (松風) 西條松雲
「春の雪」



西條松雲書

180×60cm

◆濃墨によるエネルギー感ある筆致と潤濁の変化が魅力的。下部の渾筆部さらに紙面に切り込むような強靱な線がほしい。

(紅瑤評)

現代詩文書

(宗苑)

白井真理 「トラピスチヌ修道院」



白井真理書

240×60cm

◆1行目の大字の流れよく、暢びやか。後半2行は潤濁のバランスが自然。全体のまとめ、落款もよい。

(和楓評)

臨書 (清月) 境野和子 「元永本古今集」



境野和子臨

53×165cm

◆元永風の料紙に、太細の変化もよくつかみ、きめの細かい臨書を全うした。特に張りのある細線が魅力。

(洋子評)

部分拡大



創作の部(39点)

漢字—5点

かな—8点

現代—11点

前衛—15点

臨書の部(14点)

漢字—12点

かな—2点

総出品点数

53点

〈特選候補者〉

(創作の部)

「漢字」

粹仙 藤井龍仙

もく 西川 藤象

「かな」

潮音 齊藤 杏邑

水堅 伊澤 香雨

奥田 小林 純風

「現代詩」

うる 今関 心華

うる 橋 由華

大拙 畠中 成山

「前衛」

紅瑤 佐藤 成美

蓮紅 大友 紅蓉

篤信 三浦 朱風

大拙 佐藤 陽子

一弦 工藤 和香

紅瑤 松本 秀皋

(臨書の部)

「漢字」

紅瑤 相澤 敦子

千葉 猪又 理扇

紅瑤 金井みどり

紅瑤 木暮 千晶

漢字研究部
(隷書木簡)

選評 川島舟錦

今月のホープ作品



倉林順一

漢字研究部 特選 倉林順一

楽しく競える仲間がたくさんいて、切磋琢磨できる環境のなかで刺激をたくさん受けながら日々精進できているのだと思います。力まずのびやかに線質の深さを追求していることの方がえる作品です。

◎漢字研究部総評

20数年前「木簡」の本物に「触ってもいいよ」といわれ「息をのむ」「高揚する」「時間

が止まったかの感覚」の中、我を忘れて見入った感動が蘇ってきます。保存状態がよく文字が鮮明、自然で流麗、かつのびやかで大胆。小さいものののに線質は深く縦画が美しい。楽しんでいるかのような「冊」になっていたであろう中の一行書8本でした。

「目習い」「手習い(たくさん書く)」「感動する」ことが、上達の秘訣であると思います。



空蒼心
蒼美良恵紅
風翠子弦霞



蒼裕香
裕美紅絵黃
香子結雲理扇



舞紫
白雅恵美
乃慧芳泉紀



舜水
麗和り睦彩
水流香か月香

篆刻

【四月十五日締めきり】

〈出品規定〉審査員を含む、誰でも出品可。

① 篆刻 (ア) 課題による語句 (イ) 原印自由

(出品の際、原印のコピー添付)

② 創作 語句自由

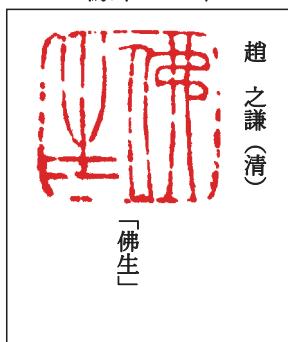
○ 印面の大きさは2.3cm (八分角) 以内とし朱文、白文自由。

○ 印箋は市販のもの、半紙横1/2の大きさに切ったものも可。

○ 創作、篆刻とも応募は一人一点。

3月号 篆刻課題

〈原印コピー〉



趙之謙 (清)

「佛生」

◎ 出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記、並びに落款 (氏号) を入れる。

〈特 選〉



「貴山」

篆刻

特選 久保村 南城

やや押印に難あるが、印全体の捉え方は大変しっかりしています。



「寒月」

創作

特選 大沼 樵峰

「寒月」の白文2文字。何よりも構成が見事、余白の朱も絶妙。

◎ 篆刻部総評

今回は篆刻、創作、二課題ともにやや低調感は否めませんでした。特に創作においては、それが顕著でした。更なる精進を期待します。

(大峰評)

717号篆刻優秀作品

選評 後藤 大峰

(篆刻)

硯水 久保村南城

秀作 (60書)

大雲 小沢華仙
大雲 小野寺幸喜
大雲 柿沼彩香
大雲 片岡豪峰
北日 成田希喜
北日 成田能喜

佳作 (60書)

硯水 伊藤敏男
附 中 岩井孝雄
上 織田真奈美
蘇我 後藤考市
遊 佐藤育嗣
やま 中川研治
橋本 清麗

(創作)

石心 大沼 樵峰

秀作 (60書)

秀惠 阿部雅悠
秀惠 伊藤祥花
炎心 佐藤祥花
炎心 伊藤祥花
四枝 塚田祥花
生苑 中島義則
宗苑 茂木詢水

佳作 (60書)

書画 相川治舟
遊雲 赤星文庵
弘舟 阿部祥越
慈空 坂本寛山
眩耀 佐々木青霞
関口 天峰

送 料

一か月の購読部数が1部〜9部までの一回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上	送料免除

◎ 郵便物・清書・送金・一般事務等は
101-0031 東京都千代田区
東神田一ー一六ー七
東神田プラザビル三階

公益財団法人 書道芸術院

電話 (03) 3862-1954
FAX (03) 3862-1957

お問い合わせ、ご連絡は、
月曜日〜金曜日 九時〜十七時の間に
お願いします。(土・日・祝日は休み)

令和三年二月二十五日印刷
令和三年三月一日発行

定価 一部 七五〇円

編集兼 辻元洋一 (大雲)

発行人 株式会社 リンクス

印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田一ー一六ー七
電話 (03) 3862-1954
FAX (03) 3862-1957
振替 〇〇一五〇四一三五五八

ホームページ <http://www.linso.co.jp/shogei/>

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和三年二月二十五日 発行
令和三年三月一日 印刷

(毎月一回一日発行) 書道芸術 第七一九号